

片隅の迷路

開高 健

毎日新聞社

片隅の迷路

〔検印省略〕

昭和51年8月10日 新装版第一版

¥ 880

著 者 開 高 健

編集人 桑 原 隆 次 郎

発行人 伊 奈 一 男

発行所 毎 日 新 聞 社

〒100 東京都千代田区一ツ橋

〒530 大阪市北区堂島上

〒802 北九州市小倉北区紺屋町

〒450 名古屋市 中村区堀内町

印刷所 図 書 印 刷

製本所 大 口 製 本

片隅の迷路 目次

発端 三

七首 五

最初の証人 元

急転 七

疑わしい夏 六

そして裁きは…… 六

消えた証人 一〇四

暗転また暗転 二六

追いつ追われつ 一三三

少年たち 一五七

弁護士とお告げ 一七三

遠い、曲った道 二四

片隅の迷路

発端

海に近い、小さな町。

晴れた日に歩くと、空が広くて、明るい。空襲で焼かれたことがあるから古い建物がなく、町と人の垢がまだ空にしみこまないでいる。道路は広く、白くて固く、まだくずれていない。日光と雲にはここからあまり遠くない沖の輝やきが映されている。干潮時になると陽にむれた川泥は、潮と海藻の、新鮮な、重い熱のこもった匂いをあげる。

この町の特徴をあげるのはむづかしいことである。町の人も答えるのにとまどう。県庁所在地で、木材を産出し、ワカメがとれる。そのほかにこれというものはなにもないようである。学生の就職率は近県でいちばんであるが、それはここの大学が全学連に入っていないという珍らしい事情によるのである。子供はタヌキの合戦の話を聞いて大きくなり、大きくなると大阪へでいく。大阪へは半日ぐらいの時間でいけるのである。

ときどき東京あたりから文化人たちがやってきて、講演会をする。ウソも方便ということがあったのしいウソは人生の薬味です。フランスのラブレールというえらい文学者も、「三つの真実にまさる一つのきれいなウソを」という言葉をおこしてありますが……というようなことをしゃべり、話がおわるとストリップ小屋へでかけるのである。

ある種の人なら、ひょっとすると、答えに困ったあげく、この町の特徴は人口にくらべて飲み屋の数が異常に多いこととです、などというかも知れない。たしかに駅や繁華街のあたりにはいたるところにまるで色とりどりのマツチ箱をまきちらかしたように飲み屋や酒場がある。せまい、どぶくさい路地におしあいへしあいになっている。どの店にも客がいっぱいになっているところを見ると、この町の感情は、大別して、やけくそか有頂天かたいくつの三つであろうか、と思いたくなるが、しかし、これはなにもこの町だけの現象ではない。日本全国、たいいていの地方都市がこれである。

この町のいちばん大きな土木工事は橋である。海のせまくなったところに巨大な鉄のつり橋をかけるのである。大都市との交通をよくし、資本と工場を誘致して県の産業をふるい起そうという案である。市長たちは東京へかけて

予算会議で格闘をやり、お金をふんだくつてくると、礎石の工事にとりかかった。ここまでは珍らしく進取的に見えたが、礎石の除幕式のときに市長が挨拶をして一つの悩みを告白したというのである。橋をかけるのはいいけれど、橋をかけたなら、大阪や神戸あたりのビート小僧たちがそれをつたってオートバイでとんでくるのじゃないか。オートバイでとんできて、そして、この町の娘たちにちょっかいをだしたり、さらっていったりするのじゃあるまいか。ドカドカと。土足で。これが防護はひとえに県民各位の御協力をまつよりほかない次第であります。真剣な顔をしてそういった、ということである。

その気になれば一日に十五時間ぐらい眠れそうな町である。

警句の好きなイギリス人は、一日に一度自殺を考えないやつはバカである、といったが、これは電気や印刷術が発明されて以後につくられた言葉にちがいない。いつ、だれが、いいだしたのかは知らないけれど、それは、もう、はつきりとそうである。はつきりと。放火、自殺、強盗、汚職、放言、変態、麻薬中毒、脅迫、ゆすり、首つり、とびこみ、バラバラ、箱詰め、集団毒殺。ナイフに、薬に、庖丁に、ピストル。なにがなにやら、もうもうとひしめいて

いて、朝起きて新聞を見ると顔を雑巾で逆なでされたような気持になり、いま這いだしてきたフTONのなかへそのまもどってしまいたくなる。なんとも、はや、私たちは頭から泥水を浴びて暮らしている、どんな「悪」にも不感症になりそうである。せかせか、キヨロキヨロ、しじゅう追いたてられ、その日暮らしで、まるでプランクトンのように、ノミのように人ごみのなかを跳ねまわり、軽口をたたいたり、必死に頭を使ったりしているけれど、これで死んでから解剖してみたら脳味噌の表面がお月さまの表面みたいにになっているのではないかしら。髪の毛と頭蓋骨をすかしてそれが薄明のなかにかんで見るところが眼に見えそうである。心臓に手をおいて寝てごらん、奇怪な夢を見るよ。

一日に十五時間ぐらい眠れそうな町でもこれはおなじことであった。事件が発生したとき、それは、新聞の社会面の熱心な愛読者である第三者の眼には、まったくありきたりで、平凡な、曲のない事件と見えた。被害者とおなじ町内に住んでいる人びとは、はじめのうち、いろいろなことをいいあった。とりわけ推理小説に眼のない連中は現場検証をしたり、聞きこみにまわったりしている刑事の動静をうかがい、おどろくほどたくさん材料をかきあつめ、そ

れを貼りあわせたり、つないだりして、ときにはガヤガヤと、ときには夜一人でこっそりと寢床のなかで、想像をめぐらして、たのしんだ。戦前の町にはたいいていどの町内にも一人は「源ばか」とか、「呆太郎」などという、子供または大供がいて毒のない笑いをふりまいて歩いていたらけれど、戦後はどういいうわけからか、姿を見かけなくなった。そのかわりに推理小説狂があらわれた。

しかし、新聞の読者はもちろん、推理小説の読者も、やがてはこの事件を忘れていった。あまりに毎日、大量の、新手の事件がつきつきあらわれるせいもあるが、一つの理由は、この事件の特徴的な性格のためである。その性格はさいごまでのこつて、事件と人を支配した。すなわち、兇器と犯人が見つからなかったのである。容疑者は被害者の生前の関係をめぐって何人もあげられたが、みんなアリバイがあるか、証拠不十分かで、つきつきに釈放された。一週間たつても、二週間たつても、犯人は見つからなかった。その迷宮入りの状態は、ほぼ、九ヵ月もつづいた。事件は十一月に起り、翌年の八月になるまで眠りつづけたのである。

十一月五日の朝のことである。

市内の新田町三丁目十六番地に住む加納という中央市場

の事務員が自転車にのってロータリーのあたりを走っていた。加納は中央市場の事務所ではたらいいて、毎朝五時頃に起きる習慣があった。市場までは自転車でゆく。市場につくのは五時十分頃である。勤勉な男なので、この時間割は正確だった。

ロータリーは駅の近くにあり、市内の目抜き通りである。十一月の五時頃なので、まだあたりは薄暗く、ひえびえとして、人影のない広い道の上で夜が去りがてに迷い歩いていて。一人の男が徳農機具店の新築工事場あたりからでてくるのを加納は見た。男は工事場の前から歩道をつたってロータリーを左にまがり、古川橋の方へ走っていった。加納は自転車からおりてあたりを見まわしたが、べつに異状はないので、男の走った方向へいき、ロータリーを左にまがり、道をすかし見たが、男の姿はなかった。もとにもどったとき、声を聞いた。

加納はのちに、それを、女の声で

「お父ちゃん……」

「どろぼう……」

悲鳴だった、と証言した。

しかし、声はそれきりで、べつに騒ぎも起らないようなので、加納はそのまま自転車を走らせて市場へいった。

あとで証人として呼ばれたとき、加納は、男のことを説明して、五尺四寸ほどの中肉の男であるといった。しかし、薄明のなかでは、顔も服も靴もわからなかったといった。

そして、工事場の付近から走りだしたところは見たけれど、工事場のなかからでてきたかどうかは、そこは見えていないからわからない、と証言した。

ほぼおなじ時刻に、山際町二丁目七番地に住む稲垣という魚屋が自転車を通りかかった。彼も薄明のなかで声を聞いた。女の叫び声で、稲垣は、それを

「火事やあッ……」
と聞いた。

声の方向に走っていった稲垣の前までいったが、べつに火も煙も見えないのでもどろろとすると、そのとき、稲垣の工事場の板戸がたおれ、一人の男がとびだしてきた。

(こらッ、なんぞ、切った、はったやナ)

あとを追いかけると、男はロータリーをまがって、古川橋の方へ走った。ちょっとそのあとを追ったが、姿を見失った。ほかにいそぎの用もあったので、そのままにして帰った。稲垣はのちに証言して、その男は五尺四寸くらいで、黒の上下服を着た、若い男である、といった。ラジオでインタービューされたときも彼はおなじことをいった。

加納と稲垣では少し時間がズレている。二人ともその場では時計を見なかった。二人とも推理小説の愛読者ではなかったのだろう。どんな不意の場に出会ってもあわてずさわがず時計を見ておく、という習慣を持ちあわせていなかったようである。

警察は五時十七分に、稲垣に事件があったという急報をうけつけた。これは事件簿に記されている。稲農機具店のとなりの黒田という薬屋が稲の末娘の道子にたのまれて電話したのである。稲の妻の洋子は自分の寝ていた部屋の電話を使おうとしたが、それは切れていて発信音が聞こえなかった。道子をやらして薬屋に電話をたのんだのである。電話だけでなく、電灯も切れていて、つかなかった。あとで、屋外の電灯電話線の切れていることがわかった。なにか鋭利な刃物で、おりまげるようにして切られた、という判定で、刃物はベンチ様のものだと推定された。

五時三十分頃に刑事が現場に到着し、七時五十分から二時間にわたって実況見分調書がつくられた。それによると、つぎのようである。

被害者は稲農機具店の主人の山田徳三であった。彼は自宅の四畳半の寝室で殺され、仰向けになっていた。のどをはじめ、全身に九カ所の刺傷があり、大量出血が原因で死

亡した。おなじ部屋に妻の洋子と末娘の道子が寝ていた。

洋子は脇腹に刺傷があり、背にも刺傷があった。壁には山田徳三が刺されてたおれるときに手でなすっていった血痕がついていた。部屋のなかには血みどろになっていた。ふとんには薄くラバー・シューズと推定される靴痕がついている。四畳半のうしろは裏庭になり、ここに店員の二人、柳原と坂根が寝泊りする仮のバラック建の小屋があり、四畳半のとなりは新築中の鉄筋コンクリート三階建の新館である。足場が組まれているが、ロータリーの表道路に面したところは板塀になっており、その出入口は、警官が現場についたとき、外に向かってひらいていた。このことは犯人が外部から侵入したものであるという見解を警察に抱かせる、一つの証拠となった。新館と四畳半のあいだのせまい通路、なる木や、踏板などには血がついていて、なる木も踏板も検出してみると、両方とも血液型はA型であった。徳三のそれはO型で、洋子のそれはA型であった。このことはのちに彼女が夫を刺殺したのだとする見解の一つの証拠となった。しかし、いずれの見解をとっても、犯人がA型であるという見解はうごかなかった。店員の柳原少年は裏の水道端に壁に向かって一本の七首が切先を上にしてたてかけてあるのを発見した。七首には血がついていたが、そ

の血液型は検出できなかった。しかし、しらべてみると、かすかな銅の反応がでてきた。このことは、洋子が、犯人が外から侵入したように見せかけるため店員の坂根に電灯線と電話線を切り断るよう強制し、坂根少年がそれにしたがって屋根に上って電灯電話線を切ったのであるとする見解の一つの証拠となった。しかし、新品でなくて、すでに何度も使われたことのある刃物には大なり小なり、すくなくともその七首から当時検出されたような程度の銅反応は常識的にみとめられるものであるという研究室の報告にも、また、注意をしておく必要があるだろう。

洋子の陳述はつぎのようだった。

当日、徳三は農機具の売掛金の回収に一番の汽車で集金にでかけることになっていた。それで、妻の洋子、末娘の道子、三人で、四畳半に寝ていた。商売の方はうまくいって、いまでも鉄筋コンクリート三階建の新館を建築中だったが、妻の洋子は体が弱く、ずっとぜんそくに苦しんでいた。その朝も五時頃に洋子がせきこんだので、徳三は眼をさまし

「苦しかったら、横になったら、どうや？」

と声をかけた。

洋子は咳をおさえ

「昨夜は、よう眠れたわ」

といった。

部屋の裏の方で、そのとき

「奥さん。奥さん、いたはりまっか？」

「誰や、坂根さんか？」

洋子が聞いたが、返事がなかった。徳三は、ヘエ、と声をかけながら寢床から起きあがり、枕もとの障子をあけた。障子の外は廊下で、幅は三尺ほど、ガラス戸が入っている。徳三が障子をあけたとき、外の薄明が射して壁にぼんやり光が映った。その瞬間、徳三は

「はあっ……」

息を吐くような、吸いこむような声をあげ、たたらを踏んでうしろにさがった。その瞬間、誰かがいっしょについて入ってきた。徳三とその男はドスドス畳を踏んでもみあい、争いあっている様子だった。徳三が手をのばして電灯をつけようとするのが見えたが、電灯はつかなかった。洋子が道子をゆりおこして抱きかかえ、その場にすくんでみると、徳三が手をふった。それは彼女に逃走をうながしている合図のように見えた。彼女は道子を抱えて部屋の隅へ抱いてゆき、すでにあいていたガラス戸から外へ道子をだした。体がふるえ、うまく歩けなかった。

洋子が道子につづいてガラス戸の外へでようすると、

同時に、侵入者も徳三の体からはなれ、彼女のそばをすりぬけて裏にでようとした。そのとき、洋子は、脇腹に、つめたい感触をうけた。声をあげたが、それは

「お父ちゃん……」

だか

「どろぼう……」

だか

「火事やあッ……」

どれであるかはよくおぼえていない。

侵入者が裏にとびだしたので、つづいて、あとを追った。侵入者は新築中の建物の土間をぬけ、板塀のすきまをこじあけて、表道路へ逃げてゆく後姿が、薄明のなかにもよく見えた。

部屋にもどって、警察に電話しようとしたが、電話は通じなかった。電灯もつかなかった。けれど、薄暗がりのなかに徳三が血まみれになり、どてらの裾を踏みみだしてたおれているのが見えた。洋子は道子を呼びこみ、二人で徳三に枕をあてがったり、フトンを体にかかけたりした。道子が、お父ちゃん、と呼ぶと、徳三は薄く眼をあけたようだったが、なにもいわなかった。

洋子は裏のバラックの仮小屋で寝ていた坂根少年と柳原少年を呼び、それぞれ連絡をたのんだ。二人はすぐにうごいた。先妻の子供たち四人と義母たちは新築工事中、昭和町のほうにある本宅で暮らしていたので、坂根少年はそこから連絡にいった。柳原少年は市民病院へ医者呼びにやらされた。坂根少年はその帰りに、近くの坊主橋のたもとにある派出所へ事件を知らせにたちよったが、派出所ではすでに本部から連絡をうけていたようである。

子供たちがかけつけると同時に、知らせをうけた近所の外科病院から菅原医師がかけつけた。柳原少年が市民病院から医師をつれてきたが、その医師が来たときには、すでに菅原医師が検診中だったので、市民病院の医師はそのまま病院にひきかえした。菅原医師は現場を乱さないように注意しつつ、よこたわっている徳三の体のにじりよったまぶたをあけ、心臓の鼓動をしらべた。医師はちよっとだまっていたから、徳三のまぶたを閉ざし

「……お気の毒ですが」

といった。

電灯がつかないので、医師は薄暗い部屋のなかで懐中電灯をつかって検診をしていた。それを見て、現場保存にあっていった警官の一人が、電灯をつけるよう、つかなかっ

たら故障をしらべるようにと、その場にいわせたみんなにいった。そこで、坂根少年は、寝間着姿のまま屋根へのぼり、電灯線が切れていることを発見した。このときの坂根少年の姿はとなりの薬屋の黒田が見かけている。黒田は坂根少年が寝間着姿のまま屋根へあがっているのを見て「注意せんと、あぶないでえ」

と声をかけた。

坂根少年は屋根からおりと、電灯線が切れていることを警官に知らせた。警官はちよっと考え、まだ現場を乱してはいけないから修繕するのはしばらく待つように、といった。坂根少年は洋子から

「服着かえなさい」

声をかけられたので、そのまま顔を洗い、服を着かえにいった。そのとき、柳原少年が、裏の壁ぎわに七首が切先を上にしてたてかけてあるのを発見している。

菅原医師が、診察を終って、病院にかえった。医師は、洋子が脇腹と背に傷をうけているのを見て、病院に入院するようにといった。坂根少年がフトンを病院にはこぶことになった。洋子は寝間着の裾に血しぶきをつけ、脇腹から血をにじませていた。夫が絶命したのを知ってから、うつぜん足から力がぬけた。彼女の眼は血走っていたが、うつ

ろで、髪もみだれ、すっかりあおざめた顔をしていた。病院へはとも一人で歩いていけそうになかった。それを見て、長女の竜子が肩を貸し、右手をとった。左手は近所の須藤がとって、助けてくれた。洋子は、竜子と須藤に左右からたすけられ、人ごみをわけて、ゆっくり道を歩いていった。途中で病院へフトンをとどけた坂根少年とガソリン・スタンドの前ですれちがったが、洋子はなにもいわなかった。のちに竜子はたずねられると、そう証言した。

坂根少年は家にもどると、警官を電灯線の切れた場所に案内した。線は電灯線も電話線も、するどい刃物で切られて、だらりとぶらさがっていた。つなぐのは長い線でつなげ、と警官が指図したので、坂根少年は線をとりに屋根からおりた。彼にはいくらかの電気工事の知識があった。山村からできて農機具店の住みこみ店員をしていたが、彼は機械いじりが好きで、ひまなときにはよく科学雑誌の付録の青写真などを眺め眺めラジオの組立などをしているような少年だった。彼は警官にいわれると、すぐに家のなかへ入り、どこからか電線をさがしだしてきて、屋根にのぼった。彼は、だから、屋根には三度のぼったわけである。坂根少年が屋根にのぼっているあいだに、配電会社から電気工夫がやってきた。したにいた柳原少年が、工夫を、

事件現場の部屋に案内した。工夫は故障の話を聞くと、部屋のすみの開閉器をしらべた。開閉器はあいたままになっていた。工夫がその開閉器をしめると、すぐに電灯はついた。それを見とどけてから工夫は帰った。工夫が帰ったあとで、坂根少年が屋根からおりてきた。彼は話を聞くと、いちばんはじめに屋外線をしらべようとして屋根にあがるまえに開閉器をしらべ、ヒューズをしらべてみたが、開閉器はすでにひらいてヒューズはついていたので、手をつけてはいけなと思い、そのままにして、屋根へのぼったのだ、と説明した。

この日、調書をとられたのは四人だった。柳原、坂根の二少年と末娘の道子は警察で調書をとられ、洋子は入院した菅原病院のベッドで調書をとられた。柳原、坂根の二人は、その朝、別室の洋子の叫声で眠っているところを起されてからのことをそれぞれ話し、道子は自分の目撃したことを話した。柳原、坂根の二少年の陳述には、そのときは、とくに疑問を抱かせられるような点がなかったが、道子の陳述は係官の注意をひいた。彼女は当時、九歳だった。

聡明な少女ではあったが、係官はその年齢のことを考え、慎重な注意をとった。かならずしも彼女の陳述を丸飲みこみに信用したわけではなかった。それは、当然の態度であ

ろう。が、事件発生の現場にいたのは死んだ徳三をのぞくと、洋子とこの少女だけであつた。

道子は警察署でくりかえした。

「……お母ちゃんに起こされたんや。すぐ眼をさましたけど、電気が消えてた。お父ちゃんは電灯に手をかけて、お母ちゃんは障子のとこにたつてた。知らん男の人も部屋のなかにおつた」

「それはどんな恰好してた？」

係官がたずねると

「フクメンした男の人や。フクメンしてた。フクメンした男の人やつた。うち（私）、見たんや」

「どんな色のフクメンやつた？」

道子はたずねられると、泣きじゃくりながら考えこみ

「薄茶いろやつたか……」

といつた。

菅原病院では洋子がしらべられていた。彼女は左脇腹と背に傷をうけていた。背の傷は小さかったが、左脇腹の傷は大きかった。皮膚と肉を裂いて内臓に達する、というほどではないにしても、縫わなければふさがらないほどの大ききであつた。洋子は縫われるときになって、はじめて、疼痛をおぼえた。それまでは夢中になにもわからなかつ

た、と彼女はあとあとまで、人に説明した。

係官は、あおざめきつた顔をしてベッドに寝ている彼女にいろいろの質問をした。彼女はひくい声だが、ハッキリした口調で、答えた。夫が死んで深い衝動をうけている気配は全身に感じられたが、とりみだしてどうにもならないというようなそぶりは見せなかつた。質問には考え考えながらも、的確な答えをだそうとする努力をした。係官は、気丈な女だ、という印象を抱いた。その後、何ヵ月にも、また、何年にもわたつて、どの係官も、彼女が勝気で頭の切れる主婦だ、という印象を抱いた。

係官が得た知識によると、彼女は四十歳、山田徳三とは十年前にいっしょになつた、ということだつた。それまでに彼女は二度、結婚に失敗して、離婚した。先夫とのあいだに子供はなかつたが、徳三と結婚してから、道子が生まれた。徳三も先妻との間がうまくいかず、子供は男二人、女二人の四人できたが、離縁していた。離婚してから生計を得るためにスタンドをひらいていた洋子とそこで知りあい、いっしょになつた。それ以後、洋子は酒場をやめ、家事をするかたわら、徳三の農機具販売の仕事をたすけて、業者との会合にも夫にかわつてたり、集金にでかけたりというようなこともした。けれど、さいきんは持病のぜん